

<2011～12 年度ロータリー情報 10 分間コーナー「奉仕の理念」の纏め>

2012.6.13 高萩 RC ロータリー情報・研修委員会

(2011～12 年度のロータリー情報・研修委員会の活動として、ロータリー情報についての研修を掲げ、7 月から例会の中で毎月一回「ロータリー情報 10 分間コーナー」を設け、「奉仕の理念」を中心に取
り上げてきたので、「奉仕の理念の変遷」について纏めた)

I. <ロータリーの奉仕に関する暦年順の事項および奉仕の理念の考え方について>

- 1) 1905 年 2 月 23 日シカゴのガスターバス・ローアの事務所に、ポール・ハリス、ハイラム・ショーレー、シルベスター・シール、ガスターバス・ローアの 4 人が集まって、**親睦と互助（友人をつくり、さらにビジネスも成功させたい）**を目的とした社交クラブが設立された。

< 定期的会合（隔週毎）と一業種一会員 >

- 2) 1905 年 3 月 23 日第 3 回会合で初代会長にシールが指名され、名称を「ロータリー・クラブ」と決定。
(会員は 9 名)

- 3) 1906 年 1 月にシカゴロータリー・クラブの定款（7 条からなる定款と 12 条の細則）が制定された。
定款第 2 条で RC の目的：(物質的互惠と親睦)

- ①クラブ会員の事業の利益拡大
②通常社交クラブに付随する親睦及びその他の特に必要と思惟する事項の推進

小堀憲助氏の「原始ロータリー論」（著書「ロータリー運動とは」から抜粋）

ロータリーの中心概念は「相互扶助」

┌	① 同業者排除
	② 職業上の助け合い
	③ 異業者間の発想の交換が利益をもたらす

- 4) 1907 年 1 月にドナルド・カーターの入会問題を契機に、ロータリーに対社会的意義の自覚が生じ、奉仕の考え方が定款に追加された。

(ポール・ハリスは「RC はエゴイズムの塊であってはならず、ドナルド・カーターのいう『世のため人のためになるクラブでなければ永続性も将来性もまた社会性もない』という考えに応じて、RC で奉仕を推進すること」を決意した)

定款の目的に追加：③シカゴの最大の利益の推進及び市民の誇りと忠誠とを市民の間に広めること

- 5) 1907 年シカゴ RC 三代目会長のポール・ハリスの 3 つの新しい方針

- ① 奉仕理念の提唱——ここでの奉仕は漠然とした対社会的な奉仕の考え方
② シカゴクラブの現状打開とクラブの充実
③ RC の拡大に向かって準備すること

ポール・ハリスは「我ら少数の職業人の親睦のエネルギーをあげて世のため人のために」を提唱——ポール・ハリスの新方針により、奉仕派と互惠・親睦派（多数派）との対立が発生——

- 6) 1907 年にシカゴ市内に公衆便所を設置する運動を展開。(地域社会の諸団体やシカゴ市議会を動かして 3 年の歳月を費やして公衆便所を完成させた社会奉仕活動)

- 7) 1908 年クラブの拡大——サンフランシスコ RC 創立、

- 8) 1909 年クラブの拡大——オークランド、シアトル、ロスアンゼルス、ニューヨーク各 RC 創立

- 9) 1908 年アーサー・F・シェルドンが入会

上記ポール・ハリスの奉仕の考え方を知り、シェルドンはビジネススクールでかねがね講義していたサービスの概念がポール・ハリスの奉仕の考え方に一致するものがあると考え、サービス概念をロータリーに持ち込んで「ロータリーのサービス概念」を確立した。(後記. 5、6 ページに内容記載)

- 10) 1908年「サービス概念の導入」により、ロータリー・クラブが社会制度上確固たる地位を築いた。
 同業者排除を唯一の基盤とする感覚的親睦団体から、地域社会の良質な職業人の横断的把握を基礎とする精神的親睦団体になった。会員の親睦を出会いの場とする「奉仕の心」に向けての絶えざる努力が、企業管理の体質改善となって現れ、それが徐々に自己の私利私欲獲得の方法を改善すると同時に自由競争の場である業界において提示されることを通じて、業界の浄化の先例となり、商業主義そのものが改善されようになった。
 会員が職業上の問題を例会に持ち込むという一種の「話し合い運動」を内容とする職業上の精神的互惠主義を残し、1908年にこれを一般概念としてのサービス（奉仕）と名付けた。
- 11) 1910年全米ロータリークラブ連合会の結成
 ポール・ハリスとシェルドンが奉仕の理念を強烈に推進しクラブの拡大を目指したことにより、シカゴクラブ内で発足時の「親睦・互惠を中心とする派」とハリスやシェルドンの「奉仕・拡大を推進する派」の対立が起こり、分裂の危機に陥ったが、1910年に全米ロータリークラブ連合会を発足させ、拡大は連合会、親睦はクラブでと棲み分けた。 <全米RC連合会は5か条の綱領制定>
- 12) 1911年にシェルドンが唱えた「He profits most who serves best」とコリンズが唱えた「Service, not self」（のちに Service above self に変化）の二つがロータリーの非公式の標語として採用された。
- 13) 1912年模範的RC定款を制定し、創立時の物質的互惠主義がRCの目的から削除された。
- 14) 1915年に、ロータリアンの具体的な活動指針となる「**職業人のためのロータリーの倫理基準——道徳律**」（1913年RI会長ラッセル・グライナーによって提唱され、ジェームス・ピンカム、ロバート・ハント、パーキンス、ジョン・ナントが中心になり作成）を制定し、業界にロータリーの奉仕の考え方を広めた。ガイ・ガンデイカーが作った「レストラン業界の道徳律」が有名。
- 15) 1916年にガイ・ガンデイカーは「ロータリー通解——小堀憲助訳」、または「ロータリーの心得——田中毅訳」を出版し、シェルドンの職業奉仕の考え方をうけて、ロータリーの理想とその活動を包括的に述べ、さらにクラブ運営や管理について纏めた最初のロータリーの教科書を発行。
 これにより、「ロータリーのサービスの概念」が確定し、ロータリアンに広まった。
「友人に奉仕することこそ、人間の真摯な努力」、
「利己の心を抑え、利他の心を育む」
 例会の目的として、その「自己改善」と言う精神的要素をあげている。ロータリー親睦の実質的内容は「自己反省」と「自己改善」であり、ロータリー親睦の「両面性——社交性と自己反省」、すなわち「奉仕の原型的パターン」を見出すのである。ここでクラブ親睦は「奉仕の心」と呼ばれているものであるが、それを原因としてその対地域社会への効果は「奉仕の心の応用」、つまり「奉仕の実践」となるもので、この実践には千差万物的な社会改良活動が含まれている。
 これ故に、ガンデイカーにあってはロータリアンの世界の規律は、
- ① 精神性、
 - ② 個人中心主義、
 - ③ 社会的連帯性
- としてみる事が出来る。
- この頃から、社会への奉仕の在り方を巡り、「理論派」と「理論と実践の調和派」の論争が激しくなり、1923年の「決議23-34号」の採択まで続いた。
 職業奉仕派（理論派）：ロータリー運動は「奉仕の心の形成」を目的としており、個人の奉仕活動
 社会奉仕派（理論と実践の調和派）：奉仕活動に重きを置き、奉仕の実践こそがロータリー運動
- 16) 1917年アーチ・クランプ基金創設「世界で善を成すための寄付金」（1928年ロータリー財団に変更）
- 17) 1920年東京RC設立
 福島喜三次によって、ロータリーの内容が紹介されたことから、ガンデイカーの「ロータリー通解」の考え方が、日本のRCの中心となり、特に大阪RCは福島を囲んでRCの制度的原理に基

づいた知識を吸収した。また第二次大戦中は軍部の圧力を避けるためにも、ロータリーについて日本的な考え方を取り入れて、生き延びてきた面もある。(国旗の掲揚と国歌斉唱)

18) 1921年のエジンバラ大会でシェルドンが「ロータリーの哲学」を講演。

さらに、この大会で国際親善と世界平和の考え方が導入された。この時の国際親善と世界平和の考え方は、ロータリアンの **fellowship** による国際親善と世界平和への貢献である。

ただし、これは現在の社会奉仕の延長にある国際奉仕とは異なる。

国際奉仕の考え方が導入されたのは、1927年のオステンド国際大会の四大奉仕採択からである。

19) 1922年連合会が国際ロータリーと改称された。

20) 1923年セント・ルイス国際大会で、1915年からの職業奉仕派（理論派）と社会奉仕派（理論と実践の調和派）の激しい論争は、ロータリーの奉仕の理念を明文化した「決議 23 - 34 号」（ナッシュビル RC のウィリアム・メーニヤ Jr とシカゴ RC 会長のウィリアム・ウエストバーグの共同起草）の採択により決着した。

特に「決議 23-34 号」の第 1 条は「ロータリーの哲学」を明確に定義したものである。

「ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務及びこれに伴う他人のために奉仕をしたいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—『超我の奉仕』の哲学であり、これは、『最もよく奉仕する者最も多く報いられる』と言う実践的な倫理原則に基づくものである。」

第 2 条以下で、RC と RI の機能分担を明確にし、「奉仕の実践」に関するロータリアン、RC と RI の原則を明確に区分し確定した。

基本的には I serve であるが、サンプルとしてクラブの活動を認めた。

「利己と利他の調和=奉仕」

21) 1923年関東大震災に際し、東京 RC に対して、RI 及び世界中の RC から大阪 RC 経由で多額の見舞金が贈られた。

22) 1927年ビビアン・カーター「ロータリー解析」——四大奉仕の解説書

——奉仕の実践が叫ばれるようになり、1927年に四大奉仕の考え方を導入——

今までの 2 分類（例会内活動と例会外奉仕活動）から、四大奉仕の 4 分類に変わり、内なる奉仕は「クラブ奉仕」、外への奉仕は「職業奉仕」、「社会奉仕」、「国際奉仕」と仕訳され、ロータリーの奉仕の実践と組織が一致した。

この頃より、例会を通しての親睦よりも奉仕の実践に目が向けられるようになり、社会奉仕活動に傾斜してきた。

23) 1928年ロータリー財団発足（1917年創立されたアーチ・クランフ基金は「ロータリー財団」と改称）

24) 1931年 RI が発行した「目標設定プラン」というパンフレットの中に、

The Ideal of Service とは

- ①超我の奉仕
- ②最もよく奉仕する者、最も多く報いられる
- ③他者への思いやり
- ④人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなた方も人にしなさい（黄金律）

25) 1932年ハーバート・テイラーが「四つのテスト」を作る。

1943年 RI 理事会は「四つのテスト」を採択し、1954年 RI 会長に就任したテイラーは「四つのテスト」の著作権を RI に寄付した。以後、ロータリーでは、「ロータリアンの行動規範、職業奉仕実践の基準」として「四つのテスト」を奨励している。

26) 1934年 This Rotarian Age 出版

27) 1935年メキシコシティ大会で「ロータリー綱領」は四大奉仕に対応した四項目に整理された。

28) 1935年ニコニコ BOX が大阪 RC で開始

ロータリー運動については、創立から 30 年のこの時期までに「奉仕の概念」・「奉仕の実践」・「組織」・「四大奉仕」・「四つのテスト」・「ロータリー綱領」等が確立し、現在の形がほぼ出来上がった。

29) 1936年ドイツで RC 解散

30) 1937年イタリア、オーストリアで RC 解散

31) 1937年ウィル・マーニア RI 会長は「誰かが奉仕理念とは、他人のことを思い遣り他人のために尽くすことだと定義しました。他人のために尽くすことを通じて、ロータリアンは自らの職業の規範を高めながら、国際理解と親善と平和を推進するために自らの地域社会に役立つように努力しています」と述べている。これは人道奉仕活動を指している。

32) 1940年日本が RI 脱退

33) 1948年パーシー・ホジソン著「奉仕こそわがつとめ」出版

34) 1949年東京、大阪、京都、名古屋、神戸、福岡、札幌 RC が RI に復帰

35) 1950年「**He profits most who serves best**」と「**Service above self**」が公式標語として採択。

36) 1951年に現在のロータリーの綱領が確定した。

37) 1953年日本で「ロータリーの友」創刊

38) 1954年チェスリー・ペリーは「多くのロータリークラブがそれぞれの地域社会で行っている社会奉仕活動の素晴らしい業績に加えて、ロータリー運動は全体として、ロータリーの会員になる人だけでなく、人類全体にわたって、他人のことを思い遣り他人のために尽くすという **ideal of service** が受け入れられ、実行されていくものと信じています」と述べた。

39) 1955年チェスリー・ペリーは「ロータリアンは人類すべてが他人のことを思い遣り他人のために尽くすようになるまで、超我の奉仕の活動に参加するように説得すべきです」と述べた。

1937年のウィル・マーニアや1954年のチェスリー・ペリーのスピーチからは、ロータリーの奉仕の理念は「他人のことを思い遣り他人のために尽くすこと」すなわち **Service above self** を指していることが伺える。

現在の公式名簿の最終ページに **The ideal of service** とは、「他人のことを思い遣り、他人のために尽くすこと **which is thoughtfulness of and helpfulness to others** 」と言う解釈がつけられている。

これが R I で奉仕の理念を規定している唯一の言葉である

ロータリー運動から職業奉仕の理念が徐々に希薄になり、人道的奉仕活動一辺倒になるに従い、「ロータリーの奉仕の理念」の意味するところも変化してきた。

40) 1962年 WCS プログラム発足、人道奉仕活動への転換

41) 1967年財団法人米山記念奨学会設立（1952年東京 RC で構想が立てられ、1957年全国組織となる）

42) 1971年ロータリー青少年指導者養成プログラム（RYLA）設立

43) 1978年 3-H プログラム制定

44) 1985年ポリオプラスプログラム開始

45) 1987年「職業奉仕に関する声明」を発表

46) 1989年第1 motto: **Service above self**

第2 motto: **He profits most who serves best** と入れ替わる。

47) 1989年「職業宣言」を発表

48) 1992年「社会奉仕に関する声明」を発表

.....

「日本のRCでは今でも職業奉仕を重視し、高い職業倫理をロータリーの本質に求めますが、RIは奉仕の実践のそのものがロータリーの本質と捉えているのではないのでしょうか。」

II. <シェルドンがロータリーで確立したサービス概念>

シェルドンは自分が学んだミシガン大学経営学部の「奉仕の哲学」を生かし、図書販売の職業経験をもとに、シェルドンビジネススクールを開き、ビジネススクールを奉仕の哲学を実践教育する場とした。それを、ロータリーに持ち込んで、「ロータリーのサービスの一般概念」を作り上げた。

<ミシガン大学経営学部が形成した概念>—小堀憲助氏著の「ロータリー運動とは」から抜粋—

- ① 商人は利潤なくして、自己の事業を成り立たせることはできない
- ② 利潤獲得に名を借り、儲けのためなら手段を選ばないなら、社会は醜いものになる
- ③ 「利己と利他の調和」こそ、証人と顧客との関係を規律すべき偉大な原則である
- ④ この時商人も利益を得て、物心両面の幸せを得るが、顧客も商人との取引によって物心両面の幸せを得ることができる

これを、「奉仕の心」＝「利己と利他とを調和せしむべき心の中」と呼んだ。

シェルドンは、シカゴRCの会員の事業の発展と言う目的はそのまま残し、その具体的な方法を従来の物質的相互扶助から、継続的に利益をもたらす顧客を確保することによって事業を進展させようという、経営学に基づいた販売術に転換した。

ロータリーがこの考え方を採択して、物質的相互扶助から決別したことによって、その後華々しい発展を遂げることになった。

“シェルドンのサービス概念は、科学的かつ合理的な企業経営方法のことである。

一つは、自分の儲けを優先するのではなく自分の職業を通じて社会に貢献するという意図をもって事業を営めば、結果として継続的な事業の発展が得られるという考え方である。顧客に対して優れた奉仕をすることが、永続性を保ち、従って利益を累進的に与えてくれる顧客を確保するための唯一の方法である述べている。

もう一つは、人間関係から見た利益の適正配分である。事業主を取り巻くすべての人たちのおかげで事業が成り立っていることを考えるならば、得た利益を事業主が独り占めするのではなく、事業に関係する人達と適正にシェアしながら、事業を進めていけば、必ずその事業は発展していくはずである。その結果が高い倫理を備えた事業所になる。同業者たちもこれを真似ることになり、業界全体の職業倫理水準が上がっていくことになる。

これが、**He profits most who serves best** のもう一つの意味である。”

小堀憲助氏によると、シェルドンもロータリーの本質は精神的な奉仕からくる満足感にあることは知っていたが、当時のロータリー運動の中心は職業奉仕であり、会員の大多数は実業家であることから、会員の誇りを失わない表現でロータリーの哲学を示すことが適切であると考え、

「He profits most who serves best」という物質的な表現の言葉で説いた。

(「ロータリー・クラブ——その理論と実態と批判」から抜粋)

シェルドンは、相手の身になって考えようとする親睦の根底にある友愛心が、「物質的相互扶助」から「精神的な相互扶助」へと深まっていくことに着目して、第1に職業分類表を作成し、各職業から良質な会員を選ぶこととした。第2には職業が異なった良質な会員がその独自の職業的発想を例会で相互に交換することにより、自己研鑽し、人格の向上をはかり、企業の道徳的水準を高め、その修練を積むことによって、天地の理法が見え、やがて会員一人ひとりがサービスの精神的世界の体現に達することが出来ると考えた。

- * ロータリーの奉仕哲学は自然の法則であり、宇宙の摂理にかなった絶対不変の法則である。
- * ロータリーの奉仕哲学は継続的に利益を得るための人間関係の基本的原則である。
- * 顧客に満足を与える具体的な経営方法を総称して「サービス」と言う言葉で表し、継続的に顧客を獲得し、結果として、高い職業倫理に繋がる。
- * 利益の最適配分により、結果として倫理基準の向上が図られる。

シェルドンによってロータリーに持ち込まれた「サービス概念」が、ロータリーの職業奉仕の考えの中心であり、社会奉仕も国際奉仕もそこから展開してきた。

Ⅲ. <シェルドンの奉仕理念の纏め>——ロータリーでの4つのスピーチで述べたことの纏め——

- (1) 1910年第1回全米RC連合会年次大会の奉仕哲学についてのスピーチ
- (2) 1911年第2回全米RC連合会年次大会に寄贈したスピーチ原稿「私の宣言」
- (3) 1913年バッファロー大会のスピーチ
- (4) 1921年エジンバラ国際大会のスピーチ「ロータリーの哲学」
第2680地区パストガバナー田中 毅氏著「シェルドンの森」より

- ① 原因結果論——小さな炎には小さな熱、大きな炎には大きな熱がある。
事業の失敗は、結果である利益を先に望むことにある。先に原因があり、後に結果がついてくる。
- ② 価値ある幸福の要素（幸福の三角形）——他人から愛情や尊敬を受け、曇りない良心と自尊心を持って、仲間との取引をした結果として物質的な富即ち報酬または利益を得ることは、この上ない幸福と言うべき。
- ③ 価値ある奉仕の要素（奉仕の三角形）——まず、品質の高い製品をつくり、次いで十分の量をつくり、管理の状態即ち事業を営む人間の行動を正しく処理することで、「品質、量、管理の状態」が適用されなければならない。
- ④ 意思の要素（意思の三角形）——自らの強い意思の力を発揮しようと思えば、認識能力がしっかりしたもので、その上精神的な能力と肉体的な能力がしっかりしている必要がある。
- ⑤ 宇宙の摂理の要素（創造主の三角形）——すべての事柄は、宇宙の摂理によって支配されている。全知、全能で普遍的な存在である創造主すなわち、全ての物質の提供者でもある自然の摂理によって支配されている。
- ⑥ 社会に奉仕をするための要素——利益を得るために仕事をすると考えることが失敗に繋がる。社会に奉仕するために職業があり、社会に奉仕した見返りとして報酬を得ている。
- ⑦ 人生の元帳——借方は、義務、責務、責任を、貸方は、権利、名誉、特権を表す。義務・責務・責任という本来の原因を遂行することが、権利・名誉・特権と言う結果を得る唯一の方法である。
- ⑧ 金銭の必要性——ロータリー哲学は金儲けを否定するものではない。生存する基本的な必要条件、すなわち衣食住を調達する手段として金銭を持つ必要がある。さらに人間が生きていくために、衣食住以上のもの、文化が必要である。人間は文化という装いを持つ必要があり、その為にも金銭が必要である。
- ⑨ 教育とは——教育とは、知識を教えることではなく、前向きの資質や、望ましい資質を引き出し、開発することである。真の教育の目的は、人間の守備範囲を増やすことで、能力・信頼性・持続性・行動力を高めることである。
- ⑩ 人間関係の四つの要素——自分の存在、相手の存在、両者が話し合いの対象とする対象や品物の存在、話し合いをする両者の心の通い合いが必要である。
- ⑪ 人生は海——人生は海のようなもので、ギブアンドテイクの絶え間ない潮の満ち引きが物事

を解決してくれる。与える奉仕が先でなければならない。受け取る報酬を先にしようとするから混乱するのである。

- ⑫ 原因と結果——奉仕という原因によって、利益と言う結果が得られるのである。職業に携わるのは社会に奉仕するためである。

後になって、ポール・ハリスは「ロータリーの奉仕の理想とは、物の過程の最初に奉仕を置くものである。奉仕の理想を標榜するものは、受けるべき物質においてではなく、先ず与えるべき奉仕に着眼すべきである」と述べている——「This Rotarian Age」

IV. <ロータリーの発展>——小堀憲助氏著「ロータリー・クラブ—その理論と実態と批判」より抜粋
ロータリーは未熟な実体で生まれ、短期間に実に多角的な発展を遂げた。発展の原動力は、会員の積極性にある。その積極性を生ぜしめる原因は不明であるが、会員のクラブに対する認識と、これを進んで発展させようとする意欲によって、多角的に進められ複雑な形で一進一退しながら発展を重ねてきた。

V. <1915年～1923年のロータリー運動の立場>——小堀憲助氏著「ロータリー運動とは」から抜粋

- ① 親睦を主とする立場——ロータリーは本質的に親睦団体と考え、楽しくやろうという立場
素朴で善意のロータリアンは、難しい理論などよりは、善意や思い遣りに基づく他者に対する暖かい行動の方が、はるかに「世のため、人のためになる」と考えている。

- ② ロータリー哲学論を主張する立場——職業奉仕哲学論

* 第1の立場——He profits most who serves best 一利己と利他、利己対博愛の調和の理論重視派
シェルドン、メーニア

* 第2の立場——理論と実践の調和派

1914年R I会長のフランク・マルホランドは、シェルドン一派は理論に酔いしれ行動力がなおざりで、ロータリー思想の社会改良機能を主張し過ぎて、弱者救済に冷たすぎるとして、シェルドンの理論の上に「理論または原理と実践との調和を大切にすべき」との考えから、身体障害者の社会復帰運動を後押しした。

(注) 決議 23-34号はシェルドン派(利己と利他の調和の理論派)とマルホランド等の理論と実践の調和派との長い論争を収束させた。

* 第3の立場——Service, not self (Service above self) ・ ・ 利己と利他の対立の極限では最後に利他の立場を選択すべきである

コリンズ、グレン・ミード、ガンデイカー、ナント

ミード:ロータリーは利他的精神で経済的目的を遂げようとする実業家の組織
でキリストの教えと社会主義の線に沿って商行為を導こうとしている

ガンデイカー:利益は利潤のことではなく、一定の取引が行われたことによって得られる奉仕の機会である

VI. <シカゴでロータリーが発生した時代背景について>——ポール・ハリス著「My Road to Rotary」

(商業道德の欠如していたシカゴで、親睦と相互扶助のクラブが創立され、発展した背景)

ロータリーのような運動が始まる時期としては、この20世紀の初めほど良い時期はあり得なかったでしょうし、それを育てる都会としては、男性的で、しかも積極的な、この矛盾に満ちたシカゴほど、適した町はほかになかったろうと思います。当時のシカゴが悩まされていた悪は、アメリカの至る所に見られました。概していえば、ビジネスは毒されていたのです。消費者や従業員、あるいは競争相手といったものに関して、高い倫理的な基準に合うようなことは行われていなかったのです。自分たちの住む町を良くしようなどという精神は、ほとんどどこでも低調でした。すべてが良い方に変わってゆくべき時でしたし、そういう時が来なければならなかったのです。

シカゴというアメリカの中西部第一の大都会から、そして人種的、政治的、経済的、宗教的な極端と極端とが出会い、衝突し、そして究極的には、何か均質なものが出来上がりつつあった大きな社会の渦巻きの中から、ロータリーは姿を現したのです。現在でも、人種の坩堝アメリカはシカゴでなお激しく煮えたぎっています。愛国的な市民たちは、最後に美味しい料理ができることを心から信じながら、質の良い材料をこの坩堝の中に入れる努力を続けています。ロータリーは1905年、湖のほとりの町で上演されていた芝居の一場面だったのです。この場面の登場人物は普通の階層の人たち実業家と専門職業人でありました。同種の職業の他の人たちと特に区別されるような点はないかもしれませんが、この人

たちは、よく使われる言葉で「社会の有益な分子」と名付けてよい人たちを、かなりよく代表していた
といてよいのではないのでしょうか。

VII. <ロータリー運動の特質>——小堀憲助氏著「ロータリー運動とは」から抜粋

ロータリーの運動とは、個人の奉仕の心の確立が、企業の倫理水準の向上に現れ、多くの顧客・従業員・取引先との良好な関係を築いて永続的な企業存続の基盤を確立することになり、アメリカではその先に業界全体の向上を目指した。

ロータリーは 20 世紀社会の商人文化が作り上げた最も優れた思想である。ロータリーの運動は親睦活動に心の改善という高次の目的を加えたものであり、その特質は次の 3 項目である。

- ① 個人性——ロータリー運動は、個人的活動を主体とする運動である
- ② 創造性——企業の管理の改善のみに止まるものではなく、状況に応じて新しい実践的行動になって現れなければならない
- ③ 普遍性——ロータリーの思想は、アメリカ国民に固有のものではない

VIII. <日本とはどう違うか>——日本の商業道（武士道に対して）確立との違い——

石田梅岩、鈴木詳順、二宮尊徳の流れにより、ロータリーが発生するはるか以前の江戸時代から日本の商人の中には、倫理観による商業道が確立してきている。それが現在も続いており、そのことからロータリーの職業奉仕の考え方は理解され、日本のロータリアンは職業奉仕に目を向けてきた。

アメリカのロータリアンの中には奉仕は神との契約であると考える会員が多くいるのに対して、日本のロータリアンの中にはロータリーの奉仕は倫理運動と捉える会員も多い。これは韓国のロータリアンも職業奉仕を中心に置いており儒教の影響も考えられる。

したがって、日本にロータリーが導入された時期には、日本では商業道が高いレベルにあったことから、アメリカのようにロータリーを通して、商業界の改革を目指すとか、業界の倫理観を育成するという考え方は薄い。

日本では職業奉仕という内面（奉仕の心）を重視してきたのに対し、アメリカではガイ・ガンデイカーによる「レストラン業界の道德律」に代表されるように、ロータリアンの使命は実践活動による商業界全体の倫理高揚と捉えられてきた。ここに日米のロータリー活動の方向性の違いがある。

IX. <RC の評価>について一考察

RC の評価は、「どのような奉仕活動をしたか、財団や米山奨学会にいくら寄付したか」ではなく、クラブの管理運営や例会などの親睦を通じて、「いかに素晴らしいロータリアンを育てたか」によって決まる。クラブの自治権を最大限に活用して、地域に根を張ったクラブ管理運営を行うことから、クラブは活性化され、魅力的なクラブの雰囲気醸成され、その結果「魅力的なロータリアンが集まり、さらにクラブも活性化される」。

ロータリークラブ創立の原点が親睦にあったことを思い起こして、今一度クラブ内に真の親睦を確立する必要がある。

X. <クラブの独立性>とは——クラブは身の丈に合った活動をすることである——

ガバナーは RI の役員であり、RI の方針を地区やクラブに伝達・徹底・指導する。

クラブはそのことを踏まえたうえで、ガバナーの方針に反しない程度で、「地域の特性を勘案したうえで、何が自分のクラブにプラスとなるのか」、「何が地域にプラスになるのか」を十分に検討し、クラブ独自の考え方でプログラムを計画・実施することが必要である。

XI. 最後に<高萩 RC の課題>

ロータリー運動は、1905 年の創立以来時代と共に変わってきていることを理解し、

「変えてはいけないこと」、

「変えなければならないこと」、

「変えることが望ましいこと」を項目ごとに整理し、地域ニーズを的確に把握して、それにどう応えることができるのかを考えて、中長期計画に基づいて毎年度計画を立て、地域でのクラブの存在意義をいかに高め、高萩ロータリー・クラブをどう活性化させ、会員増強も含めてロータリーライフをどう充実させていくかが今後も課題であろう。